

2025 年 6 月 23 日

日本言語テスト学会
会長 渡部良典 様

著作賞選考委員会 委員長 片桐一彦

2025 年度 日本言語テスト学会著作賞 選考結果報告

末尾に記載の「経緯」および著作賞選考委員会による厳正な審査・審議の結果、下記の書籍を 2025 年度「著作賞」の候補として推薦いたします。

記

受賞対象著作:

書籍名: テストは何のためにあるのか 項目反応理論から入試制度を考える
著者名: 光永悠彦(編著)・西田亜希子(著)
出版社: ナカニシヤ出版
出版日: 2022 年 9 月 30 日

受賞対象者(1 名):

編者兼執筆者 光永悠彦 氏(名古屋大学)

推薦理由:

本書は、第 1 部「共通入試のあるべき姿」、第 2 部「標準化テストを実現するために」、第 3 部「IRT を用いた標準化テストを入試で活用する」の三部構成となっており、新しい大学入試のあり方について、教育社会学と教育測定学の観点から議論が展開されている。外国語(英語)試験を含む大学入試全般を教育社会学の視点から大局的に考察し、また項目反応理論(IRT)を中心に教育測定学の基礎からを解説している。数理モデル(数式)の使用を最小限に抑えることで、幅広い読者層に配慮した構成となっている。

西田氏は、第 1 章「メトリクラーシーと日本の入試」、第 2 章「共通テストのあり方」、第 3 章「社会とテストの関係性」を執筆。光永氏は、残りの章(第 5 章、第 6 章、第 7 章、第 11 章、第 12 章、第 13 章など)を執筆し、大学入試における共通テストの複数回実施制度の可能性と社会的意義について論じている。

本書は、日本の教育現場に対して十分な説得力を持つ入試制度の設計と、公教育の改善に向けた継続的な調査研究の重要性を説いており、テストの利用に関する改善の方向性を示している。

以上の理由から、本書は JLTA 著作賞の趣旨に合致し、受賞にふさわしい書籍であると判断し、推薦する。

なお、「第 16 章 英語 4 技能入試の導入はなぜ頓挫したか」に関しては改善案が指摘されているが、多くの専門家から学術的専門性に基づいて複数の具体的詳細な提案がなされることが望ましいという考えから評価する。一方で、著作賞選考委員会としては本書の提案に対して肯定も否定もするものではないことを付け加える。

経緯:

2025 年 3 月 31 日 推薦者の条件(会員歴 3 年以上)を満たす会員より、締切日まで 1 件の推薦があった。

2025 年 4 月 6 日 学会事務局長に当該図書の購入を申請。

2025 年 4 月 8 日 当該図書が委員に到着し、査読を開始。

2025 年 6 月 21 日 著作賞選考委員会選考会議(遠隔)を開催し、当該図書を理事会に推薦することを全会一致で決定。

以上